

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻127号 平成26年6月1日発行

「修身教授録」探求（第九十一回）

肉体の護持

森 信 三

今日は黒板が綺麗ですね。黒板が綺麗ですと教師としても身が引き締まるものです。

■「発願」の話を振り返って

さてこの前の時間には「発願」という題で人生の大願を立てることの必要についてお話したのでしたね。つまり我々人間というものは、何よりもまず自分の生涯を貫いて成し遂げようとする願（ねがひ）を起こさねばならない。それはちょうど松明というものは、それに火を点けることによって周囲の間を照らすように、人間は生涯の願を起こすことによって初めて周囲の人々を照らすようになるものです。それ故我々人間は、上は君国に報じ下は同胞に報いんがために、自分でなければ行く者なき一筋の道を歩んで、いささか君国のために尽くそうという大願を起した時、そこに初めてその人の真の人生は始まるのであります。実際私も、このように人生に対して自分の生涯の大願を立てますと、周囲に対する一切の見方が自ずと変わってくるのであります。そこで今日はその一例として、私どもがこのように自分の生涯の願を起こすことによって、自分の肉体に対して如何にその考え方が違ってくるかということを申して

みたいと思います。

■「肉体」を考える

そもそも我々の肉体というものは、普通には我々にとって諸欲煩惱（しよこぼん）を起こす根源と考えられるのであります。すなわち色の欲は目より生じ、臭の欲は鼻によって生ずる。舌在るが故に美味を求めんと欲し、耳あるが故に美声を聞かんと欲し、かくして一切の罪惡は欲望に起因すると言えますが、しかも欲望の起因が畢竟この肉体にあるとすれば、この肉体こそ萬惡の根源であるということにもなるのであります。

しかるに今目を翻（ひら）してみれば、偉人の偉大なる精神はその肉体の朽ち果つるとも毫も減（へ）びず、いや肉体死することによって却（かえ）ってその偉大なる活動を始めるとも言えるのであります。しかしながらかくの如き偉大なる精神も、これを現実には生前その偉人が自らの肉体を提（ひき）げて念々（ねんねん）に道を履（ふ）み行（な）うことによって初めて体得（たいとく）せられたものであります。かくしていかなる偉人といえども、その肉体なくしては一步も修養（しゆよう）できるものではありません。まことに萬古（まんこ）に生きる聖賢（せいけん）の偉大なる教訓（きょうしん）も、それが語られ発せられたのはその肉の唇（くちべ）を通してであり、またこれが紙に記録されたのは、その生身の指を以てしたのであります。

す。さればもしそこに肉体である唇や指が無いとしたならば、いかなる偉人といえどもその教訓を萬古に残す事はできないのであります。

この間田中君のお父さんのご好意によって、わざわざ持参して見せていただいたあの慈雲尊者の筆跡にしましても、尊いのはあれが真筆だったからでありましょう。そして真筆であるとは、それが余人の手を借らずして、まさしく尊者御自身の書き給もうたものだということがあります。

かように考えてまいりますと、かつては一切の煩惱の源であるとせられた肉体が、今や道を履み行い、道を実現する上において、唯一不可欠の宝として護持せられなければならないという事に思いたるのではありません。しからばこのいわば天国と地獄ともいふべき大いなる開きは、そもそも何によって生ずるのであります。言うまでもなくそれは、その人が人生の意義に対して開眼するか否かの相違に他なりません。言い換えれば我が生涯を通しての大願を持つか持たないかによることであります。もし己が生涯を通して実現せずんばやまない大願を打ち樹てた人ならば、必ずや自らの肉体ほど、世に大切なものはないということに思い至るはずであります。思うに今日支那大陸において、あるいは飛

行機に乗り、あるいは戦車を操縦し、ないしまた東シナ海において潜水艦に乗りつつある皇軍の将兵は、ガソリンや油を惜しむこと、恐らく自分の血液以上でありましょう。何故かというに、申すまでもなくいかに勇猛果敢なる戦闘的精神といえども、ガソリンなくして飛行機・戦車などを動かすことはできないからであります。油なくして軍艦潜水艦を動かすことはできないからであります。かように考えてまいりますと、私もは、いわば道器としての我がこの肉体を護持せんとする精神に思い至らざるを得ないのであります。

そもそも肉体を護持せんとすることは、己が生涯をかけて実現せんとする大願を抱く者の、必ずや到達せざるを得ない現実の帰結であります。いやまさにその最も根底的なるものであります。

もし道というものを離れたならば、この肉体は畢竟単なる煩惱の奴、いや実に萬惡の根源をなすものであります。同時にまた我々にして、一たび道を自覚し、わが生涯を貫いて成就すべき大願を打ち樹つるに至れば、この肉体こそまさに道を行うの最大要具となるのであります。

それについて私は最近一人しじみと感じている一つの事柄があります。それはいい年をしながら、初めてかようなことが分かりか

けたということは、お話するさえ實際恥ずかしい感じがいたしますけれど、しかしご参考までに敢えて申すことにいたします。それは「いやしくも自らの大願を抱く人間は、眼に入るか入らないぐらいの一匹のアリ、一匹の羽虫といえども、みだりにこれを踏み潰したりなどしないものだ」ということであります。何となればそれはその人自身が自らの生命に対する真の愛惜の念を持つが故であります。即ちが生命の意義の限りなき深さが真実に分りかけたならば、いかに小さな羽虫一匹といえども、心なくしてこれを殺すに忍びないものがあるはずであります。かくして私は洵にお恥ずかしいことながら、四十を越えた今日初めて大乘仏教において無益の殺生を禁断せられてあることの深意の一端に触れた思いが致すのであります。どうか諸君は私のような年輩になるまでばやばやしてしないで、願わくば一日も早くこの真理を会得していただきたいものであります。それには何よりもまず「我れ何を以てか無窮の皇恩に報ずべき」という日本人としての根本問題に即して一個の大願を起し、それによって我が肉体ながら、これを護持することあたかも宝玉を所持することときに至られんことを切望してやまない次第であります。

■慈雲尊者の書について

「何か質問がありますか」

西口君「慈雲尊者の掛軸のうちに、文字は一字も書いてなくて、ただ一本棒が引いてあるだけのがありましたか、あれはどういう訳ですか」

先生「あの棒のうちに尊者の体得せられた精神がこもっているのです。今の諸君の立場からいえば、人生を生き抜く態度が示されていると申しても良いでしょう。諸君は何よりもまずあの一本の棒のもつ限らない力を体得しなくてはなりませんまい」

■「十善法語」について

慈雲尊者 十善法語 京都法蔵館発行

これは尊者の代表的な書物で、日本の全仏教書の中でも、道元の「正法眼蔵」、親鸞の「教

行信証」などと並ぶ不朽の古典的名著です。こ

の「十善法語」は文章もかな混じり文ですし、それに内容も具体的ですから、前二書に比べてずっと分りやすいのです。正法眼蔵や教行信証は今日の諸君にはちょっとお薦めできませんが、「十善法語」なら読む気さえあれば直ぐにでも読みかけられます。それでいて「十善法語」のもつ格調の高さは前二書に比べて豪も遜色のないのは、実際不思議といえは不思議と言えましょう。「正法眼蔵」は道元も言っているように、言わば宇宙大の「一顆の名珠」という趣がありますが、この「十善法語」は、かような宇宙大の水晶の球に、現実界の万象のことごとくを映じて余すなき感があります。実際自分の足元にいる羽虫の一匹も、のがされていないという趣があります。

■本の読み方

ついでに本の読み方について申せば、諸君ぐらいの頃は、一度読んでこれはと思ったところ、赤か何かで印を付けるのも一法でしょう。そうしてたとえ分らぬところがあっても、あまりそれにこだわらず、ぐんぐん先に進んでいくのです。そうしていくといつしか、先に分からなかったところも分ってくるものです。数学などですと、少しでも分からぬところがあるのを先へ進むのは絶対禁物ですが、精神的な書物はこういうふうにして読むものです。

一ページに一カ所ぐらいは「あアなるほど」とうなずけるところがあれば、それでその本を読んだ甲斐があるともいえましょう。良い本は、あの魚を釣り上げる時ゴツゴツと手応えがあるように、読む人が読めば至るところ

天上人下都箇を以て

に読み応えのあるものです。

■教育者としての心構え

諸君の教育者としての心構えは、二部二カ年に出来上らねばなりません、そのうち一年生の間にその6割5分ぐらいが出来上らねばダメです。それも2学期は運動会などでドンチャン騒ぎのうちに過ぎますし、3学期は3学期で賞味のところは7週間ぐらいですから、結局基礎は1学期です。ですから大体一学期の終わりがぐらいにシッカリ来なくちゃダメです。3月期になってもまだ教育者としての決心の立たないようでは問題になりません。家を建てるにはあちこちと地面を探し回ったうえ、大体この辺がよからうと見当がついてから先ず縄張りをするように、二部一年の間に6割5分ぐらいの見当のつかない人間はいつまでたってもダメなんです。

ですから諸君の教育者としての決心は、大体この一学期で出来なくてはダメです。それではこの夏休みにしっかりと本を読んでよく考えることですね。とにかくこの二度とないこの人生を、国民教育者となると決めた以上、死後諸君の伝記が後に来る国民教育者に読まれる程度の生き方をしたいものですね。そこまで行かねば浮かばれないというぐらいの面魂を持ってほしいものです。いざりでも東京へ

行こうと決心さえすれば、いつかは東京に着く時があります。しかしたとえ一日に二十里を行く飛脚でも東京へ行くという志を立てない以上一生かかっても東京へは着かないのです。

昔の学問をする人は皆聖人たらんことを欲したものです。これに比べれば死後自分の伝記が読まれる程度の人間になろうという位の希望は、何ら誇大などというほどのものではないでしょう。諸君の中にはかつて大臣大将を夢みた人がないことはないでしょう。しかしそれらの人もその志を縮小する必要はありません。いやいっそうこれを拡大して、我が身代りとして多数の大臣大将を生み出すが良いでしょう。たとえ大臣大将になったからとて、死後その人の伝記が読まれるとは限りません。いや伝記が書かれる人すら少ないといつて良いでしょう。とにかく今は試験中ですから試験に向かって全生精力を傾ける。それが済んだら夏休みにかけてしっかりと考えるんですね。（旧三巻 昭和18年刊）（白岩義重記）

あとがきに替えて

今号は「微言」を割愛し、森信三先生が尊敬された大阪が生んだ高僧、慈雲尊者の講義外逸話を太字で紹介し、なお読者にその書の写真を提供します。慈雲尊者二〇〇年遠忌記念で大阪読売新聞社

が2004年4月編集発行の「心の書 慈雲尊者 4」の59頁に紹介されている。縦106、2×28、5の大書。解説には「慈雲の書く棒は常に極度に抽象化されて、一本の縦線と化してしまう。したがってその表現は書の筆画と同様なものになる。本作では、墨を含ませた筆を打ち付けた起筆時の飛沫が右側に残り、その後は筆速を上げて一気に下方まで運筆されている」とある。いずれにしても雄渾無比な慈雲尊者の書を、愚生も雄大な富士山を仰ぐが如く、かつての日の大阪市立美術館で味わったのであった。（29日二纂）

第137回「かよう会」のご案内

日時 平成26年6月17日（火）
18時30分～（毎月第三火曜日原則）
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」（四ツ橋ビル 管理事務所）
06-6531-3686
交通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」（致知出版）
2300円（大きな書店で購入）
6/17老木の美
7/15故人に尽くす一つの途
8/19下生行
参加費 1000円

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hiji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin